DOI 10.18995/24344710.9.166

研究ノート

大正期の名探偵・セクストン・ブレイクについて

英語テクストにおける登場から

堀　啓子

はじめに

セクストン・ブレイク（Sexton Blake）の名は、現代日本ではほとんど聞かれない。そのため、ブレイクに関する研究はほとんど先例を見ず、分野としても未踏破である。だがセクストン・ブレイクは「十九世紀末のイギリスミステリーに登場する名探偵」として、かつての日本では相応に知られた存在であった。本稿では、ブレイクが日本にもたらされた経緯とその初期邦訳例についてまとめる。

ただ本稿ではそれらの作品紹介とリスト整理にとどめ、分析と検証は、拙論「日本におけるセクストン・ブレイクの展開　レトロスペクティブな大正の翻案作品」（『日本比較文学会東京支部　研究報告』１９　令和五年三月）に稿を譲りたい。

Ⅰ　セクストン・ブレイクとは

セクストン・ブレイクとは、十九世紀末にイギリスで誕生し、欧米諸国で爆発的な人気を博した物語に登場する名探偵である。ブレイクを擁した一連の作品はシリーズ化され、当初の小説媒体のみならず漫画化や映画化、テレビやラジオでドラマ化もされて一世を風靡した。

最初の作者はハル・メレディス（Hal Meredith）、本名はハリー・ブリス（Harry Blyth, 1852-1898）という。「最初の」と言うのは、この際立ったヒーローを生み出したブリス自身が書いたセクストン・ブレイクの作品は十指に満たないからである。だがこの極めて特徴的な、そして魅惑的な探偵の物語はその後、二百人以上の作家によって書き継がれ、小説だけで四千作を超える。最盛期は一九六〇年から七〇年代で、以降も英語圏の読者には完全に忘れ去られる存在にはならなかった。じっさい、マーク・ホッダー（Mark Hodde,1962-）など、実力派の現役作家によって近年も紹介されている。

当時の欧米に於いて、大衆読者に向けられた読み物は、薄利多売を期するものだった。そのため、戦略の一環として量産を可能とす

る複数作家体制が敷かれることも珍しい事ではなかった。経緯は様々だが、作者名（ペンネーム）、あるいは主人公の名前が、共有された例は少なからずある。作者名が共有される場合、その名は出版社管理となってhouse nameと称され、書き手たちはその個性と特徴を理解して作風を統一する。一方、主人公の名前が共有されるケースは、ミステリーや冒険ものに多く、最も有名な例がニコラス・ハンティントン・カーター(Nicholas Huntington Carter)、通称ニック・カーター（Nick Carter）である。同じく十九世紀末のアメリカで登場したニックは優れた探偵であったが、多くの作家に受け継がれ、後年にはスパイ活動にも身を投じる。

ニック・カーターがジェームズ・ボンドを意識しつつ近年まで書き継がれてきたのと同様、セクストン・ブレイクにもライバルがあった。それはブレイクより六年早く誕生したシャーロック・ホームズ（Sherlock Holmes）である。言わずと知れたアーサー・コナン・ドイル（Arthur Ignatius Conan Doyle,1859-1930）が生み出した、イギリスのベーカー街在住の彼は、現在でも〈世界一有名な探偵〉の異名を恣にする。

ブレイクの初登場は一八九三年で、*The missing millionaire*（『消えた大富豪』*The Halfpenny Marvel* no.6掲載）という長編であった。作者のメレディスはもともとミステリーや冒険ものを得意とし、アガサ・クリスティーやドロシー・セイヤーズ、G・K・チェスタトンと言った錚々たる作家にも影響を与えていた。そのため、彼がブレイクを書くことを思い立った時、この主人公をミステリーの探偵に据えようと考えたのはごく自然なことである。

折しも、ホームズのストーリーが『ストランド・マガジン』（*The Strand Magazine*）に連載されて人気を博し、その掲載作品を取り集めた最初の短編集『シャーロック・ホームズの冒険』（*The Adventures of Sherlock Holmes* 1892）が発表された翌年のことである。その人気にあやかろうと、ブレイクのみならず多くの〈名探偵〉が登場したが、いずれもホームズをモデルにしているのは明白で"Holmes clone"と称されていた。

いっぽう初期のブレイクは、そこまでホームズを意識した存在ではなかった。というよりもむしろ初期のブレイクには、ホームズとの類似点はほとんど見られなかった。*The missing millionaire*でブレイクが住んでいたのはNew Inn Chambersであり、次の作品では移転しているものの、新たな落ちつき先はWych Streetである。相棒もいたがイギリス人ではなく、ジュール・ジェルヴェーズというフランス人だった。というのも、当時はエミール・ガボリオ（Étienne Émile Gaboriau,1832-1873）や、少し後になるがガストン・ルルー（Gaston Leroux,1868-1927）などのフランス人ミステリー作家が台頭していたため、作中の登場人物もフランス人とタッグを組むことがステータスとされていたからである。また、ブレイクは『アーサー王物語』の騎士張りの恋愛もすれば、結婚していたという設定の作品さえ確認されている。

だがその後、一人でベーカー街に移り住むと、ティンカーというイギリス人の少年（出自は不祥で、貧民区出身とされていたが後に兵士という設定になり、軍に所属するためか一九〇四年以降、あまり登場しなくなる）を相棒とし、バーデル夫人というハウスキーパーに世話を焼かれながらの生活を始める頃になると、様々な点でホームズとの類似が目立つようになる。その結果ブレイクはしばしば

ホームズを引き合いに出され、その対比によって認知度が上がり、"office boy's Sherlock Holmes" あるいは"poor man's Sherlock Holmes"（貧しき者のシャーロック・ホームズ）と称されるようになった。ただ当時のブレイクの人気は圧倒的で、じっさい当時の多くの読者は「ベーカー街に住む有名な探偵」と言われると、まずブレイクを想起したという。

こうしたブレイクの特徴を最も強く象ったのは、アメリカの冒険小説作家ウィリアム・マレー・グレイドン（William Murray Graydon,1864-1946)であろう。先述の通り、ブレイクの物語は多くの作家に書き継がれていくが、グレイドンはその最たる存在で二百六十以上の作品を生み出している。彼がブレイクをベーカー街に住まわせ、ブレイクの愛犬である警察犬のペドロや、愛すべきバーデル夫人を誕生させた。そうしてティンカーやバーデル夫人が彷彿させる疑似家族や疑似家庭のイメージを濃厚に落とし込む。これはホームズにはない特徴となった。

また、ブレイクの活躍の舞台を欧州のみならず、アジア、アフリカ、アメリカへと広げたのもグレイドンである。結果的にブレイクの物語は長編化し、多くの宿敵も登場して、ブレイク自身もミステリー作品の名探偵というよりは、世界を股にかける冒険譚のヒーローへと、その特色を変えていったのである。

Ⅱ　英語授業のテクストへ

こうして欧米で大人気を博していたブレイク作品は、*The Halfpenny Marvel* や *Union Jack* さらには、*The Boys' Friend* など、イギリス色の濃い pulp magazine に連載される。単行本になるのも遅く、日本に漸くもたらされたのも大正期に入ってからである。これはシャーロック・ホームズの物語が、既に明治期から複数の翻訳や翻案に認められることに鑑みると大きく異なる点であろう。

だがホームズ作品を初め、他のミステリーと大きく異なるのは、セクストン・ブレイクが当初、英語のテクストとして原文のままもたらされた点であろう。セクストン・ブレイクを、最初に日本にもたらしたのは島文次郎である。島は東京帝国大学および大学院で英文学を修めると、京都帝国大学に助教授として奉職する。その後、教授となると同時に若くして初代の京都帝国大学図書館長も務め、その発展に寄与した。ただ家庭の事情も絡み、十年ほどで図書館長を退いた後は主に第三高等学校で教鞭を執る。

だがある日の授業中、突然「こんな本は面白くありませんから、変えて下さい」と叫んだ学生がいた。その時、島は前年に編集して丸善から出版したばかりの『二十世紀論文集』（大正三年）を英語テクストとして使用しており、通俗科学の論文を購読用にとりあげていた。恐らく島は、それ以前から学生に面白い副読本を探してはいたのだろうがこれも一つのきっかけとなったのであろう。ほどなく島は丸善書店から *Stories from Sexton Blake World-famous detective* を *Selected for use in Japanese schools and colleges*（学生用の英語の副読本）として上梓する。これが大正四年のことで、以降も彼はセクストン・ブレイクの短編を取り集めた続刊テクストを発表する。具体的には第二編を同年、第三編を大正七年、最後の第四編を大正八年というコンスタントな刊行となった。

島はこのテクストに"For permission to reprint these stories I am indebted to the editor of the Answers.-B.S."と出典情報を記し

ていることからも、この原拠を初出の *Answers Weekly* に求めていたと思われる。そしてこの点に関しては丸善編集部が各短編についての情報を求めて

> 諸編の作家を先生に問へば、先生莞爾として曰く、少壮文士の名を署せざるは従来英国雑誌の常なり、強ゐて答ふれば、十年後のルブランが進んではスチーヴンスンの亜流と云はんか、記せよドイル其人も亦実に、『アンサース』紙上、無名寄稿家の一人なりしに非ずやと。（「雑報　セクストン・ブレーク探偵譚」『学燈』大正八年四月）

と述べていることからも明らかであろう。

Answers Weekly（単に *Answers* とも）とはイギリスの大手新聞・出版社の Amalgamated Press によって大衆読者向きに廉価で刊行されていた story paper である。掲載作品は、特に若い世代をターゲットにしたライト感覚の読み物が中心で、毎週もしくは隔週に発刊されていた。

島は彼の編んだテクスト四編に収める全ての作品の原拠を、一九〇九から一九一一の間に刊行されていた *Answers Weekly* の中に求めている。以下、このテクスト掲載作品の初出を、*Answers Weekly* のバックナンバーと照合したものを記しおきたい。なお（　）内は、同誌の出版年を示す。

①第一編　*Stories from Sexton Blake World-famous detective*

A Modern Alchemist　1075　(1909)
An Artificial Clue　1076　(1909)
The Morehampton Mystery　1078　(1909)
The house of the Cliff　1080　(1909)
The Ancient Monk　1081　(1909)
The Black Cat　1082　(1909)
The Empty Tin　1089　(1909)
The Silver Lock　1091　(1909)
No Robbery　1095　(1909)
For Sale Deposit　1100　(1909)
The Adventure of the Coffee Pot　1106　(1909)
The Black Pearl Of Bahrein　1109　(1909)
The Storton Mortor Mystery　1114　(1909)
The Beoken Wicket Gate　1120　(1909)
The Recipe for Rubber　1146　(1910)
The Stolen Elephant　1166　(1910)

以上、十六編の所収作品中、初めの十四編は一九〇九年、最後の二編は一九一〇年の刊行である。

②第二編　*The Tower of Silence and Other Stories* (*Being Volume II of the Stories from Sexton Blake World-famous detective*)

The Tower of Silence　1083　(1909)
The Strange Case of the Millionaire　1127　(1910)
The Chilworth Emerald　1132　(1910)
The Stain on the Sill　1155　(1910)
The Man from Marchester　1159　(1910)

Submarine F4　1160　(1910)
Sexton Blake's 'Failure'　1161　(1910)
P.C. Barter　1165　(1910)
The Mallingworth　Mystery　1174　(1910)
Kit the Jockey　1176　(1910)
The message in Cipher　1179　(1910)
The Haunted Major　1181　(1911)
Hushed Up　1195　(1911)
The Blue Diamond　1199　(1911)
In Gaolbirds' Feathers　1152　(1910)
The Tower of Diamonds　1206　(1911)
In Borrowed Plumes　1207　(1911)

以上、十七編の所収作品中、一九〇九年の作は一編、一九一一年の作品が五編で、余の十一編は一九一〇年の刊行である。

③第三編　*Sexton Blake and Mlle Justine and Other Stories* (*Being Volume III of the Stories from Sexton Blake World-famous detective*)

Mademoiselle Justine　1134　(1910)
The Adventure of the Lady Typist　1135　(1910)
The Affair of the Burgravian Attaché　1136　(1910)
The Affair of the Three Candles　1137　(1910)
The Mystery of the Callow Youth　1138　(1910)
The Goggenheim Bank Affair　1140　(1910)
A Fifth Form Dilemma　1187　(1911)
The £1.000 Cheque　1164　(1910)
The Lost 'Pom'　1168　(1910)
The Green House at Hampstead　1221　(1911)
The Great Auk's Egg Affair　1141　(1910)
The Vicar's Overcoat　1169　(1910)
A Holiday Task　1097　(1909)
The Snow Man　1124　(1909)
The Clue of the Torn Curtain　1130　(1910)
The Blue Line　1085　(1909)

以上、十六編の所収作品中、一九〇九年の作は三編、一九一一年の作品が二編で、余の十一編は一九一〇年の刊行である。

④第四編　*Blake in Wey's Copse and Other Stories* (*Being Volume IV of the Stories from Sexton Blake World-famous detective*)

In Wey's Copse　1167　(1910)
The Sign of the Acorn　1117　(1909)
The Golden One　1092　(1909)
The Marked Hand　1099　(1909)
The Old Print Mystery　1121　(1909)
The Crooked Telephone　1131　(1910)
An Unscrupulous Rogue　1133　(1910)
The Rug Box Mystery　1151　(1910)
The Stolen Miniature　1173　(1910)
Steel Studs　1177　(1910)
The First Burglary　1180　(1911)

The Ferret 1184 (1911)
A Safe Place 1186 (1911)
Diamond Cut Diamond 1188 (1911)
A Moneyed Ghost 1189 (1911)
The Professor's Landin-Net 1192 (1911)
The Mystery of the Lost Hairpin 1123 (1909)

以上、十七編の所収作品中、一九〇九年の作は五編、一九一〇年の作は六編、一九一一年の作品が六編である。

以上を確認すると、所収されている作品の順番は、島のテクストの第一編、第二編は概ね原典のバックナンバー順に採択されているのに対し、後半のテクストになるほど、原典のバックナンバーの順序に乱れが生じているのが確認できる。島はこのテクストを編むにあたり、あくまでも学生の教育目的であることに鑑み、情操教育に向かないと思われる凄惨、奇異な内容の作品は省いている。だがそのためか後半になると、数が揃わなくなり、前号で洩れた作品を再度スクリーニングし、掲載したためであろう。

また、*Answers Weekly* 自体がセクストン・ブレイクの話を掲載したのが一九〇八年から一九一一年に限られるため、島はこの期間の原典だけを入手しえたのであろう。この経緯の詳細は、*Answers Weekly* 本誌の確認作業が必要となるため、爾後の課題として稿を別にしたい。

Ⅲ　セクストン・ブレイク作品の普及

こうして島がセクストン・ブレイクを日本にもたらすと、同じ丸善が版元ということもあろうが、『学燈』がこのテクストの宣伝を兼ねて、数号にわたりその中の一編ずつの翻訳を掲載する。その際、学生のみならず一般の読者にも同テクストを薦めたこともその普及を後押ししたであろう。

ただやはり最も大きな注目を集め得たのは博文館雑誌の『新青年』であろう。初代編集長の森下雨村は、ブレイクの作品を自ら翻案して大正九年の同誌の創刊号に掲載する。以降もブレイクの翻訳あるいは翻案を継続して同誌に掲載したが、その多くは島のテクストに掲載されたものである。それらは翻案と言い条、ほぼ原作に忠実な内容で翻訳に近い。

例えば、雨村が手がけて創刊号に掲載した『沈黙の塔』は島のテクストの第二編の標題にもなっている *The Tower of Silence* を原典としていると思われる。この作品は、急死したある貴族が今際の際で、隠し子の存在を明らかにし、その証拠書類をセクストン・ブレイクに託そうとしたものの、その貴族の後継者とみなされていた甥が自らの既得権を死守しようとして邪魔に入り、書類を探しに行くブレイクと死闘を繰り広げる、という内容である。試みにこのなかの一場面を比較してみたい。

これは、その貴族であるリングデール伯の危篤に立ち会った医師が、駆け付けたブレイクに、伯の遺言を伝える場面である。①が原作、②が雨村の翻案である。

①…however,it now appears from the statement he made me, that he contracted a secret marriage in 1885, the name of Smith, with a chorusgirl named Seymour.

His wife, he said, gave birth to a son in 1886, and died a few weeks later, never having known her husband's real name and rank. After her death, his lordship paid an old woman to adopt the child. Since then, the old woman has died, but the child is alive, and is now a youth of twenty-two.

②ところが私に仰有つた話では、千八百八十五年にスミスといふ歌妓(をんな)と結婚をなすつたことがあるさうです。そして翌年男のお子さんがお生れになつたさうですがスミスといふ女がその年に死んでしまつたので、仕方なく或る女の許へ里子に預けたところが、その婦人も間もなく死んでしまつたさうです。が、そのお子供は達者で、今何処かにゐらつしやるさうです。ところが、こゝに困つたことは伯爵は結婚する時御自分のお名前をすつかり隠してゐらつうしやつたので、スミスといふ女も、お子供を預つた婦人も伯爵だとは知らず、無論、当のお子供は自分がリングデール伯爵の令嗣(あととり)だとは夢にも知らう筈がないといふのです。

こうしてみると、雨村の翻案は、原作にかなり忠実な情報を盛り込んでいる。ただ伯の使った偽名を、結婚相手の女性の名前としており、彼女の亡くなった時期もやや曖昧にされている上、子供の年齢も記されない。他にも、ブレイクらが到着した時刻を原作では"a quarter to three"とあるのを「三時一寸過ぎ」としている。こうした、ストーリーに余り影響のない細かい点は、誤訳というよりも注意を払わずにただ適当に日本語に置換するのみという姿勢が目立つ。

いっぽう、貴族が秘密結婚をしたり、後年に落胤が現れたりするというような実在の出来事が少なからずあった当時のイギリスの時代背景については、雨村は丁寧に扱い、邦人読者にわかりやすく補足して説明している。ここに雨村の配慮は明らかである。

ただこうして雨村がブレイクを好んで掲載したのはやはり、彼の恩師でもあり英文学の泰斗と目されていた馬場孤蝶でさえも、「馬場さんは『セークストン・ブレーク叢書』を二、三百冊も抱え込んで、虫眼鏡であのザラ紙の細字にいどみかかるほどの凝り方になってしまった」(森下時男『探偵小説の父・森下雨村』文源庫　平成十九年)というほどに、ブレイクに魅了されたという、ブレイクの広汎な魅力が大きかったのであろう。

以降、江戸川乱歩や横溝正史も言及するように、セクストン・ブレイクの翻訳は、ミステリーのジャンルに限らず種々の雑誌にも掲載され、原書についても丸善書店や中西屋（丸善創業者の早矢仕有的が個人的に創り、後に合併する）が相当数、輸入することで直接目にする読者も増えた。

その他は管見に於いて、単行本でも、最上野草（西條八十？）訳の『世界名探偵捕物帳第一編』(真珠書房　大正八年)、霧島譲次訳の『銀貨をにぎる骸骨』(民友社　大正十三年)、浅野玄府訳の『探偵小説全集　２４　模造宝石事件他３１篇』(春陽堂　昭和五年)などがあり、昭和半ばにも幾つかの書籍に収められている。特に初期の最上野草の訳書に所収される各短編は、島のテクスト掲載作品とほぼ一致するが、新たな原文を直接発掘したと思われる作品も増えていく。

ブレイクの訳者やその訳の手法など整理せねばならぬ点も多いが、それらは今後に稿を譲りたい。

参考文献

Boyd,K. *Manliness and the Boys' Story Paper in Britain: A Cultural History, 1855-1940* (Palgrave Macmillan,2003)

Turner,E.S. *Boys Will Be Boys* (Faber & Faber,2012)

Holland,Steve *The New Order of Detectives: The Origin of Sexton Blake*(Bear Alley Books, 2012)

Lovece,Joseph *Sexton Blake: The Missing Millionaire*(Create Space Independent Publishing Platform,2015)

Teed, G. H. *Sexton Blake's Xmas Truce* (Stillwoods,2022)

中西信太郎「島文次郎先生の思い出」『The Albion』復刊第二号 京大英文学会 昭和二十八年六月

深瀬基寛「島文次郎先生の思い出」『英文学評論』（4）京都大学大学院人間・環境学研究科英語部会編 昭和三十二年三月

湯浅篤志「解説」『謎の無線通信』森下雨村訳 ヒラヤマ探偵文庫 令和四年

湯浅篤志「解説」『東埔寨の月』加藤朝鳥訳 ヒラヤマ探偵文庫 令和四年

＊なお、引用箇所の旧漢字は、固有名詞など特別の場合を除いて、適宜新字に改めた。

DOI 10.18995/24344710.9.174

研究ノート

A Case study of Sexton Blake;
a hero detective in the world of literature during the Taisho Era

HORI Keiko

Abstract

Sexton Blake stories are quite unknown in contemporary Japan. That was not the case when they were first introduced from English story papers in the beginning of the 20th century when they were welcomed by not only school students but also the general public.

This study examines who Sexton Blake was and highlights his magnetic personality. It also sheds light on how his stories became very popular in Japan during the Taisho Era and includes a list of the Sexton Blake stories that made their way to Japan.